

一、小瀬助信の計を聞く

十二日。小瀬助信、於信州坂木驛卒する由計音來る。三十
七歳。堀部養叔次男小瀬甫庵養子也。丹直清一絶落手。

秋雲無色月無輝。惆悵孤魂何處歸。自覺浮生更幾日。

明朝復濕他人衣。

秋雲無色月無輝との御述懷殊に不堪感吟候ま。

なごりおもふけむりの末や残らん秋の色なき月の光は

又去二日直清消息に兼て、辭世の詩綴置候由にて。

挽詩

昔繆襲陶淵明。皆自作挽歌。亦達人之事也。予今年三十
五。精神蚤疲。漸不如前。自慮潘先朝露。因做二子。

以作挽詩。

三十餘年事。忽如大夢空。百歳未滿半。一生既云終。親朋
相聚哭。送我曠野中。處世良無久。歸泉安有窮。書籍委
塵土。形骸附蟻蟲。只見墳墓地。青草長春風。

鳩 巢

是を得て返しに申遣しける。

兼てしる身のはかなさのこの葉に秋の心の色も一しほ

予も亦既に四十にちかしとて、

夢の世の四十年の坂に近づきていま行末を思ふはかなさ

一、述懷

十三日。述懷

文月の十日餘り、心あしくてかきこもり侍りけるに、折か
ら魂まつる頃になん侍りければ。

魂まつる夕の露の草まくらあはれうつゝの旅をやはせむ

松下幽思 欲知山人樂。松下有清風。

此ころ誰にかたらむ山ふかき苔路の松の夕ぐれのいろ

今夜基庸より消息して、舍弟不幸の事を告知す。はらから

なるものゝ、公のかしこまりにあひける頃、老たる親の嘆

きを思ひて。

子を思ふ道にはまよふ老鶴の翼しをれていかになくらん

返し

はらからなりける人の、不幸にしづみけるを、老たる親の

みるめ悲しきなど、せうとのもとよりいひおこせたるまゝ、

申つかはしける。

音にきく心もくるし夜の鶴の子を思ふ道はよそにしれつゝ

今更になげ木なこりそ光なき常ならぬ世のつねと明して

一、横山正房の返し

十四日。去頃庭の萩の花につけて、『咲萩の一もと故に武藏
野の草しく床のうさぞ忘るゝ』と書て、横山正房へまゐらせ
けるに、返し今日落手。頗珍重の儀也。

萩の花に吹くる風のおとづれをたゞならずきく秋の夕暮

山家述懷

聞馴し山のかひあるすみか哉おどろかされし夜半の嵐も

寄草述懷

言出て何にかはせん難波江のよし輩とても假の世ぞかし

一、菊池武康へ返し

十五日。所勞爲訪武康より消息あり。昨日けふはなき魂さ
へ立かへる時節、いと故郷の空詠やり、夜前の月など心
ぐるしく澄のぼり、中々雨もふらなんと思はれ、心ぼそく
など聞えけるまゝ、申つかはし侍りる。

中々に雨もふらなん魂まつるゆふべの月の袖にくるしき

秋旅の意を

旅衣うらめしきまでおく露のはてこそなけれ武藏野の原

逢戀

待ち得てはまだ宵ながら曉の心にいたくまとはれぞする

思別戀

まつ程の久しかりつる心故まだ宵ながらたどられぞする

さらでだにゆふべ侘しき秋風に消えにし露の魂まつる頃

一、岷江入楚の歌その他

十七日。

みくさおふる池も心の底すまは終に待みむ秋の夜のつき

岷江始濫觴。入楚則無底と云意を。

觴をうかべし水も流れてはあやうき淵となれる世ぞかし

東路もかすまぬ方のある物をうらみなはてそ越の山びと

あはれいつ歸る山路の月やみんまつとしきゝて越の旅人

夕ひかり入相の鐘におもふ身の行衛にしほる秋の袖かな

猶さえて三輪の檜原の曇らねど苔路の日影春めきにけり

あだならぬ名をこそあふげ秋の月年に稀なる光まち得て

一、山本基庸へ拾遺愚草を返すとて

十八日。基庸より拾遺愚草借覽し、返しつかはすとて。

小倉山くらきにまよふ敷島の道のかぐみとすめる月かな